



北朝鮮人権侵害問題啓発週間

作文コンクール2021

入賞作品集

1日も早い拉致被害者全員の救出にむけて！

主催 政府拉致問題対策本部

後援 法務省、外務省、文部科学省





北朝鮮人権侵害問題啓発週間

作文コンクール2021

入賞作品集

1日も早い拉致被害者全員の救出にむけて！

主催 政府拉致問題対策本部

後援 法務省、外務省、文部科学省

北朝鮮による拉致問題は、我が国の主権や国民の生命と安全に関わる重大な問題であり、日本政府は、全ての拉致被害者の一日も早い帰国を実現すべく、政府一体となって、総力を挙げて取り組んでおります。

同時に拉致問題の解決のためには、日本国民が心を一つにして、全ての拉致被害者の一日も早い帰国実現への強い意思を示していくことが重要です。政府としては、拉致問題に関する啓発活動にも力を入れて取り組んでおります。特に、これまで拉致問題に触れる機会の少なかった若い世代への啓発が重要な課題となっています。

かかる観点から、政府拉致問題対策本部では全国の中高生を対象に、拉致問題関連の映像作品や舞台劇の視聴、拉致問題関連書籍の読書等を通じて拉致問題を知ってもらい、拉致被害者やその御家族の心情を理解するとともに、拉致問題解決のために自分に何ができるのか、何をすべきかについて深く考える機会としていただくことを目的として、北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール2021を実施いたしました。また、今年度は、作文コンクールに積極的に参加している学校を対象に団体賞を、英語エッセイ部門に新たに優秀賞を設けました。

最優秀賞、優秀賞の受賞者に拉致現場を視察いただき、十二月十一日に行われた表彰式では最優秀賞受賞者のうち二名から視察時の感想を発表していただきました。

この度、応募された二八五四作品の中から、入賞作品を文集にしましたので、是非、ご一読いただけますと幸甚です。

令和四年一月

政府拉致問題対策本部

【作品総数】
2,854 作品

中学生部門	1,670 作品
高校生部門	1,166 作品
英語エッセイ部門	18 作品

最終審査委員

北朝鮮による拉致被害者家族連絡会
横田 拓也 代表

株式会社産業経済新聞社
中村 将 編集局長

ニューヨーク大学
ロバート・ボイントン 教授

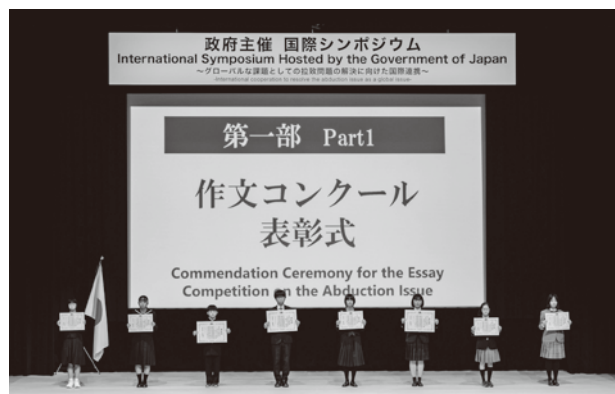
神戸大学大学院
ルックス・ジョン・マシュー 准教授

法務省
柴田 紀子 大臣官房審議官

外務省
實生 泰介 アジア大洋州局参事官

文部科学省
淵上 孝 大臣官房審議官

内閣官房拉致問題対策本部事務局
岡本 宰 内閣審議官



表彰式の模様(2021年12月11日、東京都千代田区イイノホール)

目次

団体賞

5

中学生部門

最優秀賞 拉致問題を考えて

新谷 昂 大阪府堺市立津久野中学校 一年

8

優秀賞 私たちにできること

脇山 悠 佐賀県立唐津東中学校 三年

9

優秀賞 忘れない

宮ヶ原 明依 鹿児島県肝付町立波野中学校 二年

10

特別賞 奪われた日常―思いを馳せて―

横内 琉那 埼玉県上尾市立東中学校 三年

11

特別賞 自分にできることを見つけて

牛島 彩瑛 佐賀県佐賀市立城西中学校 二年

12

特別賞 笑顔の日々に向かって

松本 宝 愛媛県八幡浜市立保内中学校 三年

13

高校生部門

最優秀賞 改めて、考える時

梅川 勉 熊本県立八代工業高等学校 三年

16

優秀賞 「私たち」の拉致問題

桑野 葵 学校法人濱名山手学院神戸山手女子高等学校 三年

17

優秀賞 だれかの日常

宮脇 ひなた 兵庫県立姫路南高等学校 一年

18

特別賞 一人一人の意識から拉致・人権問題解決へ

今井 聖希 新潟県立柏崎常盤高等学校 一年

19

特別賞 突然奪われた些細な願い

北野 優芽 兵庫県立姫路南高等学校 一年

20

特別賞 忘れてはいけない、広めよう

新國 桃永 福島県立会津農林高等学校 一年

21

英語エッセイ部門

最優秀賞 A Clue to Solving the Abduction Issue

渡邊 三千代 学校法人仙台育英学園仙台育英学園高等学校 一年

24

優秀賞 Hope

前田 望亜 学校法人渋谷教育学園幕張中学校 二年

25

優秀賞 Be Aware of Awareness Ribbons!

廣瀬 楓佳 学校法人太田国際学園ぐんま国際アカデミー高等部 二年

26

団体賞

今年度より、本作文コンクールに積極的に参加している学校を対象に団体賞を新設しております。
今年度、団体賞を受賞されました学校は左記のとおりです。

兵庫県神戸市立玉津中学校

東京都立川市立立川第七中学校

大阪府堺市立津久野中学校

兵庫県立姫路南高等学校

福島県立会津農林高等学校

学校法人溝部学園別府溝部学園高等学校

学校法人太田国際学園ぐんま国際アカデミー高等部

中学生部門

最優秀賞

拉致問題を考えて

大阪府堺市立津久野中学校 一年

新谷 昂

「僕だったら……」

恐怖が体を襲った。学校で「めぐみ」のビデオを視聴した。もし僕がめぐみさんと同じように、知らない人に、知らない国へ連れていかれたら、生きる氣力を失っていたら。ただただ、「夢であってほしい。」「信じたくない。」と願っていたかもしれない。家族とも生き別れてしまい、自分はこれからどうなるのだろうかという、大きな不安と絶望に追い込まれてしまうだろう。しかし、めぐみさんは日本にいる家族のためにくじけず、希望を抱き、前を向いたのである。僕は強く感心した。「命以外、全て奪われた。」これは、拉致被害者の蓮池薫さんの言葉だ。自分が自分でなくなる、生きている意味もなくなる気がする。僕はこれまで、「拉致」は何気なく耳にし、酷いという、単純な考えを持っていた。しかし、僕の考えていた「拉致」と現実は大きくかけ離れていた。

「拉致問題」を少しずつ調べていくと、「どうでもいい」という、キーワードが出てきた。僕は驚いた。国民の中には興味がない人も少なからずいると感じた。早紀江さんと二人三脚で、全身全霊でがんばってきた横田滋さんが、二〇二〇年六月に亡くなった。とても無念だっただろう。唯一の救いは、二〇一四年に孫のキム・ウンギョンさんとその子に面会を果たしたことだ。当たり前のことがようやく実現したと話している。早紀江さんは、「欲

しいのは言葉よりまごころと行動だ。」と言っている。

「拉致問題」は日本と北朝鮮の国家間の問題であり、北朝鮮の一般人を責めたり、差別したりしないようにしなければならぬ。新たな人権問題が起きてしまう。これを解決するため、日本全体が取り組むことが大切だと考える。

何かできることはないか。身近な署名運動に参加したり、ニュースなどで積極的に報道すれば国民の関心が高まると思う。風化させず、いろんな意見を出し合えば良いと思う。けんかするのではなく、日本から歩み寄り、対話を重ねるべきだと思う。そうすれば事実を知り、解決へつながると思う。

今年、東京五輪が開催される。スローガンは、「感動で、私たちは一つになる。」だ。世界の人々と交流を深め、助け合いができれば、このようなことは起こらないと思う。世界が一つになり、拉致問題の早期解決を願う。

入賞者のコメント

文章を書くだけでなく思いを伝えることを意識しました。より多くの方が拉致問題に関心を持ち、思いやりの心で輪を広げると、少しでも解決へつながると思います。

優秀賞

私たちにできること

佐賀県立唐津東中学校 三年

脇山 悠

北朝鮮の拉致問題という言葉を聞いて、私は何のことなのか分かりませんでした。また、ずっと昔のことなのだろうと思いました。しかし、めぐみというアニメを見て、色々なことを知ることができました。

まず、北朝鮮の拉致問題は、昔のことでも、自分には完全に無関係ではないということです。たった四十年前程前の出来事で、私たちの親世代の方々が拉致されているのです。未だ拉致されている方もいて、その方やその方の家族の気持ちになってみると、言葉では、表すことができないほどの悲しみに襲われました。

そこで私は、日本の人たちは、そのような拉致されている方に対して、どのような取り組みをされているのか調べました。私が一番印象に残ったのは、北朝鮮へ向けて行われるラジオ放送です。「しおかぜ」や「ふるさとの風」といった、調査会や日本政府が取り組んでいるものでした。実際に現地で聴いて、今は日本に帰国されている方の中には、『ラジオから、日本語が聞こえてきて感動した』や、『ニュースなどの情報だけでなく、日本の歌が聞けてうれしかった』と話した方も、いるそうです。私も、少しユーチューブで聴いてみました。そこでは、現在拉致されている方の名前を読み上げられた後、『今、拉致されている方で生きていて名前が呼ばれていない方、その方も自分では拉致被害者であるということが分かつているはずです』といった内容が流れていました。この、

ほんの少しのラジオの一部分からでも、拉致被害者の方が、どれだけ心細く思われているのか想像がつかしました。私と同じ日本人の方が、苦しい思いをされていると考えると、とても心が痛みます。

私たちに出来ることはないのでしょいか。考えてみると、直接的に拉致被害者を救うことは中学生には難しいと思うけど、今ある生活で、出来ることは、見つかると思います。まずは、この事件について知って、みんなと意見を共有することです。決して遠い話だとはいえないこの事件、今からの日本を担っていく私たちは、忘れてはならないことだと思います。積極的に意見を交わすことで、大人になってから、行動に起こしたりもできるのではないかと考えます。次に、今ある生活を大切に生きることです。当たり前の生活を奪われてしまった人がいるのだということを忘れてはいけないと思います。産まれてから想像を絶するほどの苦しみを味わわずに生きてこれたこと、学校に通えているということ、家族と幸せに暮らしているということ。今の生活全てに感謝し、大切に生きていきます。拉致被害者の方全員が、日本に帰国されて、楽しい日々を送られる日が来ることを、願います。

入賞者のコメント

北朝鮮の拉致問題は、現在の日本において、とても重要で解決すべき課題だと思います。解決し、被害者の方々が幸せに暮らされることを願います。

優秀賞

忘れない

鹿児島県肝付町立波野中学校二年

宮ヶ原明依

小学校での学習で、初めて拉致問題を知ったとき衝撃が走った。私は人一倍、不審者や誘拐などが怖いと思っている。ある日突然、拉致され外国に連れて行かれる恐怖。考えただけでもゾッとしたことを覚えている。小学生のときの私の感想は、ただただ拉致問題を怖いと思うだけだった。

中学生になった私は、先日、拉致問題啓発アニメ「めぐみ」を見た。小学生のときは、拉致への恐怖で終わってしまっていたが、今回は違った。自然と私が、めぐみさんの立場だったらと考える自分がいた。拉致されたときはとても怖かったはずだ。そして、どんなに寂しく、悲しかったことか。自由を奪われ、家族とも引き裂かれ、知らない外国に連れられる恐怖。私がめぐみさんなら耐えられないと思う。涙が止まらず、立ち上がることもできないうらう。私は家族が大好きなので、家族に会えないなんて考えられない。なぜ、北朝鮮は「拉致」というひどい行為をするのかと怒りが込み上げた。

また、めぐみさんのことだけでなく、めぐみさんの家族のことも知った。拉致被害者の家族として、家族を取り戻すために一生懸命頑張っていた。マスコミや政治家に訴えたり、署名活動もずっと続けたりと必死だった。拉致されためぐみさんは勿論一番辛いだろうが、愛する子どもを奪われた家族も、ずっと辛く悲しかったに違いない。

入賞者のコメント

私は、一人でも多くの方が拉致問題を知ることが大切だと感じ、この作文を書きました。「拉致問題を正しく知ること」が解決の力になると信じています。

拉致問題を知って、私にも何かできることはないかと考えてみた。まず、大切なことは、この拉致問題を正しく知ることだと感じた。「めぐみ」を見るだけでも、多くのことを知ることができた。めぐみさんは私たちと同じような暮らしをし、毎日を楽しんでいた中学生だった。「めぐみ」の中のめぐみさんの写真は笑顔ばかりだ。そんな普通の中学生が拉致被害に遭ってしまったということ。拉致問題の解決への歴史。拉致被害家族の活動や思いなど……。多くのことを知ることができた。

また、私の住む鹿児島県にも拉致被害者の方がいたことも知った。吹上浜海岸で拉致された市川修一さんと増元るみ子さんの二人だ。拉致問題はこんな身近でも起きていたことだったのだと驚いた。みんなが拉致問題のことを正しく知ること、何かが少しずつ今とは違ってくると思う。

そして、「知る」だけでなく、拉致問題の署名活動の機会があったら、署名をしたいと考えている。まだ、そんな場面に会ったことがないので、署名活動があったときは積極的に署名したい。私にできることは、拉致問題を正しく知り、被害者や被害者家族のことを忘れないことと、署名活動に協力することだ。そして、この事を忘れず覚えておき、大人になったときに周りに伝えていけるようにしたい。拉致問題を忘れない。

特別賞

奪われた日常―思いを馳せて―

埼玉県上尾市立東中学校 三年

横内 琉那

「北朝鮮に拉致された人の内の一人は中学生だった。」

一九七七年十一月十五日、新潟県の日本海沿岸で横田めぐみさんが拉致された。拉致被害者十七名の内最年少。当時十三歳。部活の下校途中だった。

この事実を知ったとき、私は大きな衝撃を受けた。私と同じ中学生の人が。まさか。そう思った。ニュースはよく視聴するので、もちろん北朝鮮拉致問題は知っていたし、まだ解放されていない人や、横田めぐみさんの存在も認識していた。いや、知っているつもりだったのかも知れない。

アニメ「めぐみ」をはじめ、拉致問題に関する様々な記事を読んだ。被害者の方々の、とても心細く、つらい思いをしているだろうという気持ち。そして、残された御家族や周囲の人々の、自分の大切な人を必ず助けたいと思う気持ち。それぞれが、ひしひしと伝わってきて、胸がしめつけられる思いだった。

この拉致問題を解決するためには、まず風化させないことが重要だと考える。そのために私にできることとして二つ挙げる。

一つ目は、拉致問題について深く理解することだ。

二つ目は、拉致問題を後世に伝えていくことだ。

家庭での会話の中で、拉致問題について考える機会を持つことも大事だと思う。実際に私は、拉致問題に対する考えについて家族に尋ねてみたが、やはり、私同様、被害に遭った全ての人が、

入賞者のコメント

拉致問題を深く理解し、風化させてはなりません。被害にあわれた全ての方が奪われた日常を取り戻し、ご家族と再会してほしいとの願いを作文に込めました。

日本に無事帰国し、御家族に会い、日常を取り戻すまでは解決ではないと考えていた。子どもは授業を通して学び、大人も強い関心を持ち、社会全体がこの問題から目をそらしてはならない。今、この一瞬も新型コロナウイルスが猛威を振るっているこの現状で、突然日常を奪われる恐怖を身をもって知った私達だからこそ、立ち向かわなければならぬのだ。そして、一日一日を大切に、今ここにいられることに感謝しながら、これからを過ごしていきたいと思う。

現在、まだ解放されていない方々の御両親で御存命でいらっしゃるのはわずか一人。一刻もはやい被害者の方々の解放と救出、御家族との再会を願わずにいられない。

特別賞

自分にできることを見つけて

佐賀県佐賀市立城西中学校 二年

牛島 彩瑛

日本人の日常を奪った、北朝鮮による拉致問題。私はアニメ「めぐみ」を見て、とても複雑な感情になった。

拉致問題の被害者の一人である横田めぐみさんは、当時中学生だったということを知ってとても身近に感じたし、他人事だと思っ
てはいけなく強く思った。めぐみさんの両親も助けるための活動
をしていて、めぐみさんがいなくなつてどれだけ辛かったか伝わつて
きた。めぐみさんの遺骨と言われて両親に渡された骨が、本人の
ではないと分かつたときまだ生きているかもしれないという希望も
ある反面、勝手に亡くなつたことにされていて直接関係のない私も
悔しい気持ちになった。

この問題を知って、「被害を受けたのが自分や家族ではなくて
良かった」と思つてしまつたこともあつた。でも、これは拉致問題
を他人事だと思ひ現実逃避をしている証拠だと思う。私たちにで
きることは限られているけど、少しでも力になれることがあるはず
だから、自分にできることを探して積極的に取り組んでいきたい。
また、この問題は時が経つにつれて忘れられているように感じる。
まだ解決していない問題だからこそ、解決のために協力しないとい
けないし、この問題のことをたくさんの人に伝えていく必要がある
と思う。もしかしたら、現在も世界のどこかで日本人を拉致する
という計画をしているかもしれない。それによって今後も苦しむ人
がいるかもしれない。それは自分かもしれない。様々な可能性があ

り、一人の行動で止めることもできる。その一人になるために、やっ
ぱりこの出来事は伝えていかなければならないと思う。

まずは、この問題について深く知ること。そして、被害者や被
害者の家族の気持ちを考える。実際に体験した人の気持ちを知
るのはとても難しい。私も、この拉致問題について考えて、痛感
した。でも、その人の気持ちを考えることはできる。考えること
で、もう二度とこのような思いをする人がいてほしくないという気
持ちが強まり、解決に向けて自分も何かしようと思える。何を
すれば良いのか分からなくても、絶対に力になれることはあるはず
だ。最初からあきらめず、自分も力になれると思つてほしい。

私は今まで、戦争や問題、事件などの話を聞いたときに他人
事だと思つてしまつていた。でも、今回北朝鮮による拉致問題につ
いて考え、他人事だと思わず、むしろもつと身近に感じないとい
けないと思つた。このような経験がない分、考えるのは難しかった
が現在も苦しんでいる人がいると思うと心が痛いし、助けたいと思
うようになった。正直、自分に何ができるかはつきりとは分からな
い。でも、たくさんの方のことを調べて苦しみを知つていくことで、
自分が何をするべきなのか、分かつてくると思う。

入賞者のコメント

拉致被害に遭われた方やご家族の方が一人でも多く救われて欲しいと思います。人の痛みを知り解決へ導く
行動ができる人が増えて欲しいです。

特別賞

笑顔の日々に向かって

愛媛県八幡浜市立保内中学校 三年

松本 宝

みなさんは、北朝鮮拉致問題について知っていますか。僕は、学校に掲示されたポスターを見て調べてみました。そして、突然拉致されて北朝鮮に連れていかれ、家族や友達と引き離された人々がいることを知り、胸が痛くなるとともに、とても考えさせられました。

「めぐみ」というアニメでは、当時十三歳だった横田めぐみさんが北朝鮮の工作員に誘拐され、家族や友人と引き離され、異国での生活を強いられる苦しみや悲しみが描かれていました。めぐみさんの父、滋さんは、娘が生まれたときに「人並みの幸せ」を得られるようにという願いを込めて、「めぐみ」と名付けました。しかし、このささやかな願いは打ち砕かれ、叶うことはありませんでした。拉致から四十年以上たった今でも、「娘を返して」と訴えている母の早紀江さんの姿に、心が痛みます。ずっとめぐみさんを探し続けた両親は、めぐみさんは死去したと聞かれます。しかし、北朝鮮から提供されためぐみさんの遺骨からは、他人のDNAが検出され、全て嘘だったことが判明するのです。北朝鮮はあまりにも身勝手な、非人道的な国なのかと、残念でなりません。また、アニメの中で「たった十人余りの失踪者のせいで、日本と北朝鮮が友好関係を築けなくなっているのか」という政府関係者の発言があり、僕は憤りを感じました。これは、拉致被害者やその家族に寄り添わない発言であり、日本人として、人間として信じられない発言だと思っています。

もし、自分の家族が拉致されていたら、こんな発言をするはずがありません。結局は部外者でしかないということです。僕自身、拉致被害について知り、めぐみさんや家族の過酷な状況や地獄のような苦しみを理解しようとしても、気に留めていなければ、忘れてしまいうるのです。拉致被害者であるめぐみさんや家族の想像を絶するような苦しみは、四十年以上たった今でもずっと続いているのに……。

僕が気付いたことは、見方や立場を変えることが大切だということです。そうすることで、考えが深まり、視野を広げることができると思います。横田さんの家族を支える団体やボランティアの方々が、この事件を多くの人々に知ってもらうために活動していることを知りました。僕たちにできることは、この事件を風化させないことです。インターネットを活用すれば、世界中の人々が関心を持つてくれるかもしれません。拉致被害者について知って終わりではなく、どう行動していくかが重要になります。様々な人々の意見を取り入れることで、一歩ずつ、少しずつでもこの北朝鮮拉致問題を解決に導く道を示し、被害者が家族に再会し、笑顔をとり戻せるような未来を実現できるのではないのでしょうか。僕も知る側から行動する側へと一歩を踏み出していこうと思います。

入賞者のコメント

拉致問題は、これからの未来のためにも絶対に風化させてはいけません。被害者の視点に立ち、気付いたことや自分の思いを素直に書きました。

高校生部門

最優秀賞

改めて、考える時

熊本県立八代工業高等学校 三年

梅川 勉

私は昨年、突然父を亡くした。入院していたわけでもなく、もちろん、命が脅かされる疾患を持っていたわけでもなかった。しかし、ある日のこと、それは本当に突然訪れたのだ。誰かが作り上げたドラマか映画の中でしか見たことのない出来事が、自分の身に降りかかった時、うろたえ、躊躇し、立ちすくんだ。そして同時に、思考は完全に停止し、何も考えられなくなったことを、今でも鮮明に覚えている。

大切な人を失う悲しみ、ぶつけようもない恨みや憎しみ、そして日に日に積もる喪失感。この状況に遭遇したことで、これまで、他人事としてしか捉えていなかった「北朝鮮による拉致被害者家族の感情」に、一つの実感として触れたようだった。

「北朝鮮拉致被害者」と聞いて、真っ先に思い浮かぶのは、横田めぐみさんだ。一九七七年、十一月十五日、拉致被害に会い、その後、幾度となく行われた北朝鮮への要請や会談があつて尚、いまだに帰還はかなっていない。これまでのニュースの多くは、被害者家族の方々が「悲痛な叫びと諦めない決意」を語って終わる。私が小学生の頃から何度も見てきた、変わらない光景だった。

それからさらに月日を経て、私はこの作文を書いている。その中で、私の頭の中の大部分を占めているのは、「なぜ、いまだに問題が解決しないか?」ということだった。

例えば、学校の授業の中でも、拉致被害について考える機会は、

入賞者のコメント

今回の作文は、拉致問題に対する自身の意識の低さを分かせてくれた。どうか、この現実を目を背けることなく、被害者御家族の生の声に耳を傾けてほしい。

何度もあった。おそらく、世代を問わず、皆がそうだろう。しかし、与えられる情報は、毎回同じ資料に、再現映像、受け取る側も、進展のない現実に、半ば落胆し、半ば諦めという同じ感想にならざるをえない。この事実を忘れないことは大事であるが、果たして、忘れないということだけですませてよいのだろうか。

拉致問題の解決を掲げる政治家に投票することや、署名活動に参加することなど、これらの活動にも、どこか他人事である。「大変だな」と感想を抱きつつも、署名活動で街頭に立つ方々を、横目で見ながら冷淡に通り過ぎる自分。そこには「アリが制御不能な象を倒せるはずがない」という、どこか冷めた打算的な自分が見え隠れする。いつしか他人に関心を払わなくなった日本人の感性は、現代における拉致被害に対する関心の低さにつながっているのだろうか。事実、めぐみさんの父親である、横田滋さんの訃報は、コロナの報道に埋め尽くされてしまっていた。

これから、国際情勢が変化する中で、問題解決に向けた進展があるかもしれない。結局、私を含めた国民の意識自体が変わらない限り、本質的な問題は何も解決しないのではないだろうか。改めて、考える時だと思う。そこからしか何も始まらない。

優秀賞

「私たち」の拉致問題

学校法人濱名山手学院神戸山手女子高等学校 三年

桑野 葵

「お母さん！お父さん！助けて！」

めぐみさんの声が船内に響く。アニメの台詞だと分かっている、堪らず顔を背けた。しかしこのアニメ「めぐみ」はフィクションではなく、今も終わらない現実の問題なのだ。

もし私が十三歳のとき、めぐみさんと同じ目にあったら……。アニメを視聴してそう考えたとき、もつと拉致問題について知らなければならぬと思った。私はすぐに、めぐみさんの母・早紀江さんの著書など、学校の図書館にあった関連する本を読み漁った。しかし、分かったのは無情な事実だけだった。北朝鮮からの僅かな情報や、日本政府の不安定な対応に翻弄される被害者家族たち。忘れられない話がある。横田さんご夫婦は渡韓した際、国境付近の北朝鮮の村を見に行ったことがあるそうだ。早紀江さんは思わず、「めぐみちゃん！」と、村に向かって絶叫したという。当然、返事は無い。正に、拉致問題において被害者家族、そして私たちがいかに無力かを象徴するエピソードだと思った。

「まず知ることが大事だ。そして、私たち一人一人が問題意識を持つて声を上げよう。」

これは、世界の様々な課題を解決しようとするときに決まって「私たち」に呼びかけられる言葉だ。私も、それが必要だと思つて本を読んだり、インターネットで情報を集めたりした。しかし、拉致問題は解決するのか、どうやって解決するのか、全く分から

なかった。めぐみさんが拉致されてからもう四十年余りが経つ。それでも、希望の光ははつきり見えてこない。親子の再会は年々困難に、そして不可能にもなっている。そして、今の「私たち」にはどうすることもできない。

「拉致問題について私が伝えられることがないように思うのです。」この作文を書くにあたって、私は学校の先生にそう相談した。先生の返答はこうだった。

「現実、この数年の間に拉致被害者が日本に帰ってくる可能性は高いとはいえないだろう。」

けれど、君が生きている間にその時が訪れるかもしれない。今君が考え、悩んだことは無駄じゃない、と私は思う。」

私ははつとした。もちろん、愛する我が子ともう一度抱き合うことが現在の被害者家族の願いだ。しかし、拉致問題が進展するのは私が大人になってからかもしれない。家族、さらに被害者本人も亡くなった後、私はそれを無視していいのだろうか。今の私が感じた悲しみ、怒り、そして責任を常に持ち続け、解決に向けて尽力しなければならぬのではないか。さらに、社会全体がその思いを共有し、協働することも重要だ。拉致被害者とその家族たちの声は「私たち」の声だ。北朝鮮による拉致問題を「私たち」は永遠に忘れない。

入賞者のコメント

拉致という大きな問題に、非力ながらもできること。その一心で書いたこの作文が、受賞という形で多くの方々に届くことを大変嬉しく思います。

優秀賞

だれかの日常

兵庫県立姫路南高等学校 一年

宮脇 ひなた

北朝鮮による日本人拉致問題を今までたびたび耳にしたことがあった。愛する家族が日常生活のなかで突然姿を消し、生きていくのかどうかわからない悲しみ、苦しみはかり知れないと思われる。今日見た映像に出ていた横田めぐみさんは拉致されたとき、即座に状況判断などできるはずがない。もし私がめぐみさんの立場だったら、なにができただろうか。少しでも抵抗ができただろうか。逃げようにも足がすくんで動けない、声をあげようにも上手く出せない。きっとそうなると思う。想像するだけでとてもおそろしい。

横田めぐみさんが拉致された事件について調べてみた。当時、めぐみさんは中学生であった。そこが私には少し疑問に思えた。日本語を教えさせたいのであれば教師をしている人物を狙わなかったのはなぜだろうと。その理由について推測された記事を見つけた。そこには「小さいうちから連れて行ったほうが洗脳しやすいと考えた可能性がある。その中で、何らかの北朝鮮の工作網にかかったのがめぐみさんだったことはあり得るのではないか。」と書かれている。もしこの推測が正しかったとすると、人をただの道具としている考えがすごく腹だたしい。ふざけるなとも思う。小さな幸せであふれていた、一人の少女の人生を一体なんだと思っているのだろうか。他に拉致されてしまった人たちもだ。日本語を学びたいなら、

学ばせたいなら、もつと他に方法はいくらでもあるのに。だれかの日常を奪う権利なんて誰にもないはずなのに。

もし家族や友達など自分が知っている人がどこかの国の人に拉致されたりしたら、きつと私は犯人だけでなく、その国自体を嫌い、憎んでしまうだろう。でもめぐみさんの母親である横田早紀江さんはそうではなかった。「めぐみ」の中で次のようなセリフがある。「私たちは北朝鮮に住む一般市民の人たちを憎んだり恨んだりしている訳ではありません。ただ親として今も北朝鮮に囚われる身となっている娘を助け出したいだけなのです。」

すごく考えさせられるセリフだった。心の底から、めぐみさんを愛しているのだ。愛しているからこそ、ただこの思いで一心なのだろう。

拉致をした犯人も、しなければ自分の命や家族の命が危なかったのかもしれない。しかし先ほど書いたようにだれかの日常を奪う権利はだれにもない。拉致は決して許されることではない。

拉致された人たちが一日でも早く帰国し、大切な人に再会できることを心の底から願っている。

入賞者のコメント

国全体で拉致問題を認知し、対策を考えるべきです。同じ言葉を並べるだけでは意味がありません。1日も早く「おかえり」と言える日がくることを強く願っています。

特別賞

一人一人の意識から

拉致・人権問題解決へ

新潟県立柏崎常盤高等学校 一年

今井 聖希

私は、先日学校で蓮池薫さん本人から、「拉致問題と人権」についての講話を聞きました。そこで、拉致された時から帰国するまでの様子を知って驚きとそれ以上に恐怖を感じました。

当時の蓮池さんは、二十二歳という私達高校生とさほど変わらない若さで拉致されました。その時の恐怖といたら私達には想像もできません。また、ご家族の方も急に自分の子供と別れてしまう不安、悲しみ、怒りなどのさまざまな感情があふれ出ていたと思います。しかし、このような問題を解決するのは困難なのが現実です。拉致問題はいわば人権侵害です。これらの問題を完全に解決することはできないかもしれませんが、ですが、まだ帰国できていない日本人を北朝鮮から返してもらいうことや、被害者を減らすことはできると思います。その為には、北朝鮮に拉致された日本人を返すよう要求し続けることが大切です。そして、拉致された人が亡くなったという確実な証拠が得られるまでは決して諦めてはいけないと思います。そこで大切なのは国民一人一人の意識です。国全体で拉致された人を返してほしいという意思表示が必要なのです。

ここで国内にも私は目を向けました。拉致というのは国内でいう誘拐のような事件です。他にも人権を侵害する問題はたくさんあります。私は拉致問題の解決を目指すのであれば、国内で起きているあらゆる人権問題についての解決が、拉致問題の解決

に近づけるのではないかと思います。拉致問題と人権問題は決して少人数では対処することができないという共通点があります。やはり、国民一人一人が解決のために何ができるかなどを考えようとする意識を持つことが大切になってきます。人権を侵害された人本人と家族の方達はとても悲しく、つらく、悔しい思いをします。時には命を落としてしまうことだってあります。拉致問題は国を超えて行われるので、このような思いは被害者家族にとってもつと強いかもしれません。これを他人事ととらえるのではなく、まだ苦しんでいる人がいるということをもっと多くの人に認識してもらいたいです。

私ができること、するべきことは、こういう悲しい問題を身近にいる人達に話して、広めていき一緒に理解を深めることや、悲しんでいる人や苦しんでいる人のことを絶対に忘れず、拉致被害者全員の救出が一日でも早くできるよう願い、そして活動し続けることだと考えます。そして、蓮池さんとの講話の中で一番印象的であった「拉致は命以外の全てを奪った」という言葉。蓮池さんがどのような思いを込めてこの言葉を私達に伝えたのかを考えながら日々の生活を送っていききたいです。

入賞者のコメント

私がこの作文を書くにあたって心掛けたことは、私が拉致問題に対して感じたことをそのまま書くということです。みなさんに伝われば幸いです。

特別賞

突然奪われた些細な願い

兵庫県立姫路南高等学校 一年

北野 優芽

人並みの幸せ、家族みんなで過ごすという些細でほんの小さな夢や願いは突然奪われた。学校に行き、部活動に取り組み、友達と喋る生活が突然奪われることは考えられるだろうか。いつものように元気に家を出た後、戻ってこないことを考えられるだろうか。

私はこの作文を書くにあたり、アニメ「めぐみ」を視聴した。なぜ今まで拉致問題について考えなかったのだろうか。拉致問題は一人の人の人権を奪う深刻な人権問題だ。

今から四十年以上前の昭和五十二年十一月十五日、新潟の海から一人の少女が姿を消した。当時十三歳の横田めぐみさんは北朝鮮工作員によって拉致されたのだ。私はもし監禁されたと考えることすら出来ない。四十時間の間真っ暗で寒い船倉に閉じ込められ「お母さん、お母さん」と泣き叫ぶ姿、出入口や壁などを引つかき血だらけで剥がれそうになった爪、想像するだけであてはまる言葉がないほど、恐ろしく怖いものだ。

それから二十年後、止まっていた時間が動き出した。監禁されていると知っためぐみさんの親の講演会や著名活動はテレビなどで見たことがある。中でも「北朝鮮に囚われの身となっている娘を助け出したいだけなのです。お願いします。お願いします。」と言っている姿を忘れることはない。しかし横田滋さん死去。私はこの報道をニュースで見た。懸命な活動が報われないまま、娘の顔を

見る前に他界。私は言葉が出なかった。少しでも早く拉致被害者を助け出したい。

ネットが便利になり世界の人とつながれる今、少しでもたくさんの人にこの問題を知ってもらい大きな力を集めることで、この問題に終止符を打てるかもしれない。私たちが出来ることはたくさんある。少しでも多くの人に拉致問題について知ってもらうこと。他人事ではなく自分事として考えること。抗議の声をあげること。このような作文などを書き、少しでも多くの人に思いを伝えること。二度と起こさないために、拉致という自由を奪う行為を忘れないために、問題を風化させないために、日本のために犠牲になった人たちの残してくれた濃厚な足跡を次の世代に伝えていくことが大切だ。

私は拉致被害者が「しおかぜ」や「ふるさとの風」の放送を通して日本語がきけてうれしかったという記事を見た。私も少しでも出来ることから始めていきたい。

日本は、拉致被害者やその家族のためにも北朝鮮に拉致問題について正確な事実を話させ、謝罪してもらおう権利があるはずだ。決して諦めない。あなたを取り戻すまで。すべての拉致被害者が故郷へかえられる日が来るまで。

入賞者のコメント

もし私が13歳で拉致され、40年以上帰れなかったら正気でいられるだろうかと考えながらこの作文を書きました。生きて家族に再会出来る事を願います。

特別賞

忘れてはいけない、広めよう

福島県立会津農林高等学校 一年

新國 桃永

恥ずかしながら正直、拉致問題と聞いても日本人が拉致された問題だとして認識していなかった。

夏休み始まる前、国語の授業で「めぐみ」を観た。当時中学一年生だった横田めぐみさんが家への帰宅中、北朝鮮当局に拉致された。大切な家族が突然消えた後の家族の苦悩、諦めず救済活動をする姿が描かれていた。

アニメを観て印象深かったのが、生れためぐみさんに人並みの幸せを願う両親の姿。拉致後の恐怖に怯えるめぐみさんの姿。そして、両親が救済活動時に「拉致という自由を奪う行為を忘れない。」という言葉には、様々な気持ちが含まれているのだと思った。

拉致被害者のご家族の思いが書かれている「拉致問題に対する理解を深めるために」というホームページの拉致被害者ご家族へのインタビュー記録という項目をインターネットの記事で読んだ。「何が本当なのか分からない。助けられるのかも分からない。それが辛い。」という一文であった。これを読んで、拉致された後の、心配、怒り、辛さ、やるせない気持ちなど、その家族の方々にしか分からない苦悩が感じられ胸が痛くなった。また、記事を読むとこの問題は風化しつつあるという事が分かった。拉致問題に意識がないのは、この問題を他人事に考えているからだ。そんな風化しつつあるこの拉致問題で、力のない一介の高校生

入賞者のコメント

今後も多くの方々に、被害者やご家族の気持ちに寄り添ってもらいたいと考えます。各自が自分にできることを考え実行すれば必ず問題解決につながります。

の自分にでもできる事を考えた。一つは拉致問題の詳細を調べたり、世間の人々の意見を聞いたり、専門家の方々の記事を読んだりして知識を深めることだ。二つ目は、忘れ去られないよう、私たちの学校でも行われた様に、アニメ「めぐみ」を観せてこの問題を広めることだ。もう一つは全国の郵便局において行われている「拉致被害者・家族義援金委員会」の募金活動に積極的なことだ。この三つは少なくとも私たちにでもできる活動だ。

私は日本人は思いやりの心を持っていると思っている。そんな私たちがこの拉致問題を認識し、自分たちに何ができるのかそれぞれの方法で行動に移す事でこの現状から少しでも進展するのではないかと思っている。

英語エッセイ部門

最優秀賞

A Clue to Solving the Abduction Issue

WATANABE Michiyo

10th grade, Sendai Ikuei Gakuen High School

“Our families are getting old, and we don’t have much time left. We want our children to step on the soil of their homeland as soon as possible and embrace us.” On September 3, 2021, Sakie Yokota, the mother of Megumi Yokota who was abducted by North Korea, expressed her painful feelings.

It will soon be 44 years since Megumi was abducted by North Korean agents on November 15, 1977. The earnest wishes of the victims’ families have not reached her, “the 13-year-old girl” crying for help in *The Anime “MEGUMI”* and time has gone by.

Last year, without any news of progress toward resolving the abduction issue, we received some sad news. It was the death of Shigeru Yokota, the father of Megumi, who had devoted half his life to resolving the abduction issue along with his wife. His wish to see his daughter again could no longer be fulfilled. In addition to the Yokotas and Megumi’s twin brothers, Takuya and Tetsuya, other families of the abductees have taken steps toward the early resolution through signature campaigns and lectures. To solve this problem, I believe it is important for each and every one of us to take an interest in the abduction issue and take action, starting with small steps. I participate in Kawasaki citizens’ gathering to support abductees’ families online in October to not only know and understand the facts but empathize with the feelings of the victims and their families and be close to their hearts.

Japan is not the only country affected by the abduction issue which has aimed at a peaceful resolution. According to a United Nations survey and report on the abductions, there are 14 countries of origin of the abductees and more than 200,000 people worldwide. The reality that so many people have been affected and so many families have been waiting for the return of the abductees was beyond my imagination. Until now, the abduction issue has tended to be treated as the bilateral issue between Japan and North Korea, but I believe we can find a way to solve this problem by recognizing it as a global issue, building a cooperative system among countries, and working together.

We must seriously face the fact of the abduction issue, and increase those who become interested in this issue by spreading information to more people in order to solve the most important problem for “us”. As a student of the Foreign Language Course, I would like to improve not just my English but Chinese, and internationally convey this abduction, the unforgivable human-rights violations myself. Furthermore, through the International Baccalaureate (IB), I will broaden my horizons, send more effective messages to the international community, and sincerely hope to remind people around the world of compassion and empathy. These will be gradually spun and eventually become a great power.

They don’t have much time left to reunite with their beloved families. It is up to us to create a clue to solve the abduction issue.

入賞者のコメント

500語*に込めた私の思いが、世界中の人々に共鳴し、「拉致被害者ご家族が抱き合える日」が一日も早く訪れるよう願います。鈴木めぐみ先生のご指導に感謝致します。

※語数制限最大

優秀賞

Hope

MAEDA Moa

8th grade, Shibuya Makuhari Junior High School

“Have a good day.”

Click, as your mother swings the door shut behind you. All goes well, until you're walking home in the dark with your friends and waving them goodbye at the curb before heading towards the beach shore, 7 minutes away from your house. It sounds like a typical day and feels like one too – until you find yourself surrounded in darkness, locked up in the bottom of a ship.

Misfortune can swoop into one's life and flip it upside down in an instant. Misfortune, such as being “in the wrong place at the wrong time.”

Megumi Yokota was 13 years old – only one year younger than me – I had noted with a jolt – when she was kidnapped from the shores of Niigata in the 1970s on her way home from school. For over 40 years, she has been held captive by authoritarian North Korea.

Imagine being stuck in the cycle of grieving the undead. Her parents and twin brothers spent years dealing with the loss until they learned the truth; she was alive and just across the sea, yet there was nothing they could do.

The complexity of this problem is the lack of information known about North Korea due to their high security, dishonesty and language barrier. Mystery and suspicious behavior surround the country like a death shroud, suppressing our voices along with the possibilities of progress. The government has prolonged Megumi's return to the point where her father, after years of fighting for her freedom, retired to his resting place, his dying wish uncompleted. But does that mean we must surrender to their power and deem her case “mission impossible” ?

Hope is not lost, for it is indeed a thing with feathers. We must stay firm in our stance and not let the truth fade out with time. We cannot afford the government to further prolong Megumi's return.

I, as an individual, have little power and influence. But I can use what little tools I have: writing, the ability to collect information or raise awareness among those unaware of this situation. I can take advantage of my language abilities and youth to communicate with the world using technology and social media, a source unavailable to influencers back in the 1970s. As a young person I would be able to reach out towards a larger audience in the long term. As the tense relationships between North Korea and other countries are gaining more attention than ever, it is essential that we give Megumi's freedom one last push.

These efforts are the least we can do as responsible fellow Japanese citizens or, rather, as moral people with a conscious, knowledgeable mind, sincere emotions from the heart, and a burning passion for justice in our body.

入賞者のコメント

このコンクールで終わりにするのではなく、これからも拉致問題について、自分に出来る事を考え、行動していきたいという決意に繋がりました。

優秀賞

Be Aware of Awareness Ribbons!

 HIROSE Fuka

11th Grade, Gunma Kokusai Academy

It will be 44 years since Megumi Yokota was abducted in Niigata City by North Korean agents. She has yet to be returned. Megumi was only 13 years old when her life, happiness, and dreams were suddenly taken from her. This horrible act took place in the same area my mother is from. As a result, abduction has been a topic that is close to my heart. As a result, I participate in an awareness ribbon campaign to bring attention to abduction. The use of awareness ribbons has positive aspects, but it doesn't work without sharing knowledge. The awareness ribbon campaign is an effective way to make change if we make the opportunity to talk about our ribbons.

Awareness ribbon campaigns involve people wearing a ribbon with a color associated with a cause. Typically, the blue ribbon represents abduction victims' existence and rescue in Japan. The color blue images of the Sea of Japan, which connects Japan and North Korea, as well as the sky which connects abduction victims and families (Community Welfare & Service, 2019). Participating in an awareness ribbon campaign is approachable to many people because they can wear the color as a ribbon, or accessories (Community Welfare & Service Division, 2019). Seeing the associated color can make a statement because it shows support and draws attention to the issue.

Unfortunately, the recognition of awareness ribbon campaigns is low in Japan. I conducted a survey about the recognition of blue ribbons among 65 people and 77% did not know the meaning. While we can say blue ribbon movement is not spreading, a research from Takushoku University showed that 52% of people have experienced volunteering and 69.0% have done charity events (Kanjyo, 2019). In addition, the Niigata government conducted a study about the awareness ribbon and found that in spite of 66.8% of people in Niigata choosing to contribute to the abduction problem by signing up and donating money, only 8.8% chose to contribute by putting on a blue ribbon (Public service & government, 2019). Less opportunity for people to see and hear about awareness ribbons is the reason for the ignorance of this movement.

Even though many people have experience doing volunteer or charity events, they may not know about the awareness ribbon, which means it is not working as well as it should. In order for awareness ribbons to work, those who participate must talk openly about their ribbons so that people are aware of it. Additionally, we should encourage others to participate by wearing the color and offering other ways to help, such as donating money to a registered campaign. Do not be afraid to show your color that brings awareness, and to talk to those around you about the meaning behind the ribbon. And if you see someone wearing a ribbon, ask them! It only works if we talk about it. Maybe one day Megumi will return, but until then, I will continue to wear my ribbon in her memory.

入賞者のコメント

コンクールがあったからこそこの出会いや経験を、ずっと大切にしていきたいです。そして心に感じたことを、まずは私の身の回りから発信していきます。

この作品集は令和3年、政府拉致問題対策本部の主催により実施された
「北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール2021」応募作品の中から
入賞作品を収録したものです。
文中の表現や表記は、原則として応募時の表記に従いました。

北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール2021 入賞作品集

令和4年1月発行

【発行】

政府拉致問題対策本部
〒100-8968 東京都千代田区永田町1-6-1
TEL:03-3581-8898
<https://www.rachi.go.jp>

令和4年1月発行